

日時 平成24年8月8日(水) 13:30～16:30

会場 高知共済会館 COMMUNITY SQUARE 3F 藤

出席者 受田浩之委員長、川上恵美子委員、坂本あや委員、澤田靖子委員、瀧本豊委員、  
那須清吾委員、宮上多加子委員、宮崎育子委員、宮地貴嗣委員、  
教育長(中澤)、教育次長(中山)、参事兼小中学校課長(永野)  
高等学校課長(藤中)、高等学校課企画監(森本)、特別支援教育課長(田中)、  
生涯学習課長(平野)、高等学校課長補佐(小野、竹村)、  
教育政策課チーフ(溝渕)、高等学校課再編振興担当チーフ(竹崎)、  
同課学校教育企画担当チーフ(高野)、同課定通・産業教育担当チーフ(北村)、  
同課指導主事(4名)

欠席委員 吉岡珍正副委員長、岩原利枝委員、垣内守男委員、小西砂千夫委員、  
濱川博子委員、山崎實樹助委員

## 1 開会

### (1) 日程説明、資料確認等

#### 【配付資料】

- ① 次第
- ② 座席表
- ③ 資料1 第6回県立高等学校再編振興検討委員会 資料
- ④ 資料2 第6回県立高等学校再編振興検討委員会 資料
- ⑤ 補足資料1 「ICTの活用事例」
- ⑥ 補足資料2 「総合学科の系列について」
- ⑦ 平成24年度高知県立高等学校 学校概要
- ⑧ 第7回県立高等学校再編振興検討委員会日程調整表

## 2 第5回県立高等学校再編振興検討委員会の内容確認

(高等学校課企画監：以下 企画監) 資料1-1の説明。

(委員長) 6月18日の検討委員会の概要であるが、「普通科」と「高大連携」については、「その他」も含め定足数が足りていたが、この中で出たICTの活用については後ほど補足をしてもらう。さらに普通科に関してはこの後の確認事項の③でまとめの確認をしながら検討していく。内容に関する文言等で何かあれば出していただきたい。また総合学科と併設型中高一貫教育校については参考意見であり、これに基づいて作業部会での協議内容を提出させてもらっている。この総合学科と併設型中高一貫教育校の2点については改めて今日協議してもらう。概要の文言等で何か意見はないか。

(那須委員) 高大連携で「系列的に」という言葉はどういう意味か。高大連携の取組も必要と書いているが、高大連携が必要であるという説明は、どのような説明だったのか。

(企画監) これは垣内委員からの意見である。系列的にというのは、単発的に1回だけ講師を呼んでの1時間だけの連携ではなく、授業のつながりや内容のつながりも見て、時系列も踏まえたうえで一つのことを完結させていこうという内容であった。大学との連携が必要であるということの説明は、キャリア教育等を含めた観点もあるが、より専門的なこととか、将来上級学校へ進むための観点であるとかそういうところを醸成するために、大学と連携すれば高校生の意識が高まるということである。

(委員長) 概要だけだと言葉の意味するところが不明確になることもある。概要は議事録の一つで、この後の細かい議論に関わってくる部分もあるので、さらにそこで議論をお願いできればと思う。

(瀧本委員) (3) のその他のところで、大学生の中には論理的に物事を考える学習が不足している学生もいるという文言もあるが、論理的に物事を考えるとはどのようなことか。

(企画監) 一つのことに対して知っている知っていないということだけではなく、一つの要因を見つけたら、そこから広がる可能性や洞察力であるとかそういうところまできちんと筋道を立てて考えることができる学習ととらえている。

(委員長) 他にないか。なければ検討内容に入っていきたいが、話の流れからICTの活用については、この後の確認事項・協議事項とは性格が違うので、ここでICTの補足資料の説明をお願いしたい。

(企画監) 補足資料1「ICTの活用事例について」について説明。

(委員長) 小学校で県内のICTの活用事例があるようだが、全国的に見ると取り上げられている例はそんなに多くないような気がする。今後適正配置とか、生徒の選択の範囲の確保などいろいろな話題が出てきた時に、遠隔地におけるICTの活用なども念頭に置きつつ改善を図っていくということも検討委員会では考えていきたい。何か質問はないか。なければ(2)の第5回の内容確認は以上にする。(3)の検討内容に入りたい。まず(1)の確認事項の①の第5回県立高等学校再編振興作業部会の概要について説明をお願いしたい。

### 3 検討内容

#### (1) 確認事項

- ① 第5回県立高等学校再編振興作業部会の概要
- ② 定時制・通信制のまとめ
- ③ 普通科のまとめ

① 第5回県立高等学校再編振興作業部会の概要

(企画監) 資料1-2の説明。

(委員長) 第5回県立高等学校再編振興作業部会の概要について、検討依頼事項は前回の検討委員会の意見を反映している。この中身を細かく議論するというよりも、作業部会で出された意見について、表現が分かりにくい点、疑問に思う点を指摘していただき、その後、総合学科と併設型中高一貫教育校については協議事項の中で議論していただく。

(宮地委員) P4の(3)の①のア 進学状況の件で、地域の進学に対する期待には応えているが志願者数の増加にはつながっていないとある。これはデータ的に言えることか。もう1点は、同じP4の(3)のイの男女比の問題で、ある公立中学校では男子が多くなっていて、グループ学習などの面では若干配慮しているとあるがどういう意味か。

(企画監) 前回の第5回の検討委員会資料の資料2のP18に安芸、高知南、中村があって、(国公立大学進学)割合は増える傾向だが、卒業生が減ったりする関係で国公立大学進学者の数は一概に増えていない部分もある。同じ資料2のP7の3で志願者倍率の推移があり、たとえば安芸中学校であれば平成21年、平成22年ともに1.0倍を切った状態で、志願倍率が伸びていない状況がある。

②のイについてであるが、中学校であればどちらかというと女子が活発な傾向があるので、男子と同数いたほうが良い。公立中学校では、男子が多いので授業のやり方などに配慮しているということであった。

(坂本委員) P3の③の総合学科を導入したことでの課題等だが、この時の意見の中で多様な進路希望をもった生徒に対応できる良い制度ではないかとあるが、科目数なども増えてくると思うが、現場として対応がそれぞれの生徒に合わせてできているかどうかといった細かな意見はなかったか。何を基にして良い制度と言っているか教えてもらいたい。

(企画監) 総合学科の在り方が、系列ということで、授業を生徒が選んでいって一つの出来上がる形に作るやり方が主流である。普通科なら進学、工業科なら工業系ということになるが、総合学科の場合は系列を選ぶことでいくつかの進路希望を叶えることができる。

生徒が1クラス40人で授業を受けるのではなくて、いろんな選択をしていくので一定の小規模な授業を受けることにより、自分が進路希望を叶えるうえで必要な授業を取ることによって完成させることができる学科である。そのため地域においては総合学科があればすべてが同じ授業を受けるのではなくて、選択によって一人一人に応じた対応ができるということで良い制度と言っている。

(委員長) まだ分かりにくい部分もあると思うが、総合学科については後ほど作業部会の意見も踏まえて検討委員会でも議論する。その時にも問題点を指摘してもらい、必要な情報があれば事務局にも求めていくようにしたい。

- (宮崎委員) 同じくP3の③のウで、地域の人たちの希望に添え、卒業者の多くが地元の企業等に就職しているとあるが具体的なデータはあるか。
- (委員長) 地元の会社等に就職している具体的な数値データはあるか。後でまた議論の時に紹介してもらいたい。結局今の2つの指摘は、総合学科の評価につながって行く。主観的に多様という言葉にどう応えているかではなく、具体的にどういう進路志望があつて、どういう進路指導があつて、それにどう応えたかというところまで情報が必要であるということだと思う。
- (川上委員) 多部制単位制高校の三部制について、(1)の①のオだが、本当に学校に行くことが厳しい子どもたちもいるが、高校で全部受けもてるのか。三部制以外の支援もあるのではとのことだが、(これらの子どもたちについては) 高校以外のところでということか。
- (委員長) 補足するものがあればお願いしたい。
- (企画監) 具体的にどういうところかというのではなかったが、すべて100%高校で対応するのは難しいのであって、例えば、これは委員からの意見ではないが、特別支援学校とかその他の教育機関とかもあるということで、高校ですべて受けもつというのは無理があるのではないかとということで、具体的にどこかという意見ではなかった。
- (委員長) いったん作業部会の概要についての報告はここで切らしていただきたい。次に②の定時制・通信制についてのまとめについて資料1-(3)について説明していただきたい。これは継続ですでに審議してもらっている内容であることを踏まえて説明してもらいたい。
- (企画監) 資料1-(3)の説明。
- (委員長) 網掛けの⑦を追加したとの説明であつた。このまとめについては前回もご意見をいただいている。検討委員会の意見と作業部会の意見をそれぞれきちんと反映させた形で、まずいったん取りまとめておくべきではないか。それぞれの意見を取捨選択するのではなく、いったん全体をひとまとめにしておいて、後で精査すべきではないかとの意見であつたと思う。この後の資料1-(4)についても、そのようなまとめ方で取捨選択し簡素にするのではなく、まずはすべて意見をくみ上げていこうという趣旨であつたかと思う。今の定時制・通信制のまとめについて⑦を加えたということであるがどうか。
- (各委員) (特に意見なし。)
- (委員長) 定時制・通信制のまとめについてはこれで取りまとめとさせていただいて、また別の機会にまとめの議論をさせてもらいたい。それでは③の全日制普通科についてのまとめについて資料1-(4)の説明をお願いしたい。
- (企画監) 資料1-(4)の説明。
- (委員長) それぞれ①~⑮、①~④ということで普通科と連携型中高一貫教育校について作業部会と検討委員会から出された意見を全体拾い上げたという中身になっている。何かお気づきの点があれば質問していただきたい。
- (那須委員) 確認だが定時制・通信制のところ網掛けのところが増えたのか。だとすると全日制普通科と総合学科のところ確かに文章は増えているが扱

いが違うということか。例えば、検討委員会の中でも重要な必要性を指摘しているところがあるが、前にも話したようにそういうところも入れておかないと、この短文を読んだだけではなぜそれが必要なのか伝わってこないし、まとめだけを読んだ人が実際に具体化する時に中身を解釈し間違える心配があったので、できれば丸ごとまとめに入れてはという話もしたが、今の全日制の方は、できるだけ挙げるという姿勢もあったが、なぜ定時制の方はそれが無いのか分からない。

(委員長) まず一点は、全日制の総合学科を含めたまとめについて、文言が変わっているところがあってその中に重要な発言があって、それを削除しているのはよくないのではないか。それと定時制・通信制については全体を拾い上げていないということについてどのように答えるか。

(企画監) すべてというところはそれぞれ拾い上げる基準で違うと思うが、白いひし形黒いひし形があり、それらの意見の中でこの活字にしたうえでこの資料になっているということではなくて、ここに出ていない部分ということか。

(那須委員) 例えば「学びを社会に・・・」「キャリア教育の視点で・・・」とかあるがこれらは当たり前のことではないか。こんな文章を見せられても、今までの検討委員会の中でなぜ必要なのかを議論したはずなのに、それを受けて当たり前のことを言われてもじゃあどうするのかということである。これだけの人が5回6回集まって意見を述べているわけだが、それが抜け落ちている。それすら入れないのはどういうことか。全部入れてでも足りないと思う。取りまとめの報告書になった時に、それが10ページになろうが20ページになろうが、大事な意見や内容があってその上でこうするというのがなければ意味はない。結果だけ見てどう使うのか。文章を見た人が検討委員会の議論を知らずにやろうとすると、委員会の議論のポイントが抜けてしまうのは明白である。その点をどう考えているのかということである。

(委員長) 今の質問については、最終的に取りまとめのフォーマットをどうするのか、例えばページ数も含めて、あるいは、全体の流れをどうするのかということにかかわってくる。もちろん取りまとめをする立場上、すべての発言を一語一句変えずにすべてを落とし込んでいくというのは難しい部分もあるので、先程の意見にもあったように、意向をきちんと汲んだうえで、それに対してどういうことが必要かということも含めて、言ってみればストーリーというか、発言の主旨をできるだけ反映させた形を考えていくべきではないかということである。前回は那須委員から指摘をいただいて、先程の普通科と総合学科の部分はできるだけその主旨を汲んでいるところだとは思いますが、それでもどんどん肉をそぎ落としていけば大事なところがそぎ落ち、抜けていく可能性はある。ここでいうまとめはまだまとめにはなっていない。拙速にまとめてしまうと危険だという話になってくる。今後の取り扱いも含めてということになると思うが、事務局側の考えを示してもらいたい。

(企画監) 報告を目指して文言整理をしていかなければならないのはその通りである。今までいただいた意見や出た資料を基に最終的な報告には今まで話した

内容や地域懇談会の意見やアンケートなどを踏まえたうえで、最終的な報告にならなければいけない。当然ここでいただいている意見とまとめがずれるわけにはいかないの、そういうところで新たに形を作ったうえでお示しをするようになる。

(委員長) 資料1-2に作業部会概要があり、ここに出ている意見は、より文書としては長くて説明を加えており、各委員の意見をそのまま反映しているように感じるが、那須委員が言われているのは、要はここに留めておくべきと理解したらよいか。

(那須委員) 定時制・通信制のまとめを見ると、我々が以前に議論した産業振興の観点とか、地域の特性を考えたときに、例えば小さい学校がどう連携するのとか、教育効果をどう高めるのかといったことも含めて、随分時間をかけて議論したと思うが、どこにも残ってない。本当に大事なところが抜けているので、私はこの表が不十分だと思っている。

(委員長) 今、表が不十分だという指摘があった。抜けている部分がたくさんあるということか。

(那須委員) なぜ抜けるのかということの問題視している。抜けること自体がおかしい。

(委員長) ということは、このまとめはダメということか。

(那須委員) ダメだ。

(委員長) という意見が今出た。今日、全体のまとめを最初から振り返っていくというのは検討事項もあるので、私から提案をしたい。これまでの産業系のまとめ、定通のまとめ、今日の資料1の全日制普通科・総合学科のまとめに関してまとめ方が良くないという指摘があったので、これについてももう1回きちんと先程の意見を反映させていくということによろしいか。

(那須委員) 毎回議事録の確認が来るが、あの議事録が一番皆さんの意見を書いている。そのポイントがここに全部読み込まれているかというチェックをしないと、折角ここで皆さんが議論して、このポイントが大事だといったことが抜けている。特に教育効果とか教育の仕方とか、ある程度少人数の学校でもうまく連携したら教育効果が高まるとか、逆に少人数の連携で、普通の学校以上の効果が期待できるとか、地域の特色をどう生かすかといった話もあったはず。それは議事録にちゃんと残っているはずで、重要だったと思われるポイントが、もう1回拾い直されないと何のためにここで議論したのかということになる。

(委員長) 要は抜けているということで、そこの部分をもう少し丁寧に拾い上げていくと。例えば資料1-1で検討委員会概要というのがあって毎回この概要が出てきているので、その概要の文言がまとめに反映できるよう、もう1度検討するというので取り扱いたい。もう1回言うが、まとめの部分は今日これで決定するわけではないので、抜けている部分は、もう1回漏れなく、ダブリなくやっていくということ。

- (那須委員) まとめというのは、箇条書きで最終的にまとめとするのか。それとも文章で最終的なまとめにするのか。
- (企画監) 報告のことか。
- (那須委員) そう。
- (企画監) 報告については文章になる予定。
- (那須委員) こういう2～3行の短文でなくて、ちゃんとした文章で提言がされるということか。
- (企画監) はい。
- (委員長) 前回は指摘があったので、その部分を概要、議事録というところから拾い上げていただくようお願いする。委員会ごとにこれを議論しても、なかなか難しいので、先程の指摘を1度作業としてやって各委員に投げてもらえないか。委員の皆様には、各委員の立場で抜けている、あるいは反映されていないと思われる部分をさらに指摘いただいて、それを反映させた形を委員会の中で議論し詰めていくということかどうか。それと私自身が気になっていることを申し上げたいが、検討委員会、作業部会で個別の意見が出ている。那須委員から指摘があったように、それぞれは非常に貴重な意見だということは十分に認識をしている。一方で、三部制について三部制を導入すべきだという意見もあれば、三部制は必要ないのではないかという意見もある。つまり委員会として一本化できていないような内容も入ってくる。こういうものを両論併記の形でまとめにするのか、あるいは、その方向性を少しご議論し収斂できるものについては、少し収斂の方向に向かって揉んでいく必要も一方ではあるのではないかと思う。そういう時間をまとめに関して取るべきではないかということ、前回は申し上げたが少し時間を頂戴したいと思っている。決着がつかない部分は両論併記が当然あると思う。それぞれが貴重な意見なので、この両論併記したものを教育委員会として振興計画に落とし込んでいただくということになるかと思う。ここの部分は、今まとめの指摘があったので強調しておきたいがよろしいか。つまり本当のまとめに向かっていくということになる。それでは、今指摘のあった内容を一部は宿題にしながら継続して審議をしていきたいが、全日制普通科、総合学科に関して、さらに別の視点での指摘等はないか。
- (瀧本委員) 私だけの思いで、また大変細かなことかもしれないが、8ページの全日制普通科・総合学科のまとめの③のところだが、「様々なタイプの生徒を柔軟に受け入れてくれる・・・」という表現で、単なる表現だが、ちょっと表現の仕方が様々なタイプの生徒と、何か子ども、生徒を突き放した感じ、冷たい感じの表現ではないかと思う。様々なタイプと言うと大人になると様々なタイプという表現も結構かと思うが、まだ人間形成の過程にある子ども、生徒に対して様々なタイプという表現はいかがなものかと、どうせ表現するのなら、いろいろな個性をもった生徒とか、そういった形の方が、最初に言ったように様々なタイプという表現が何かこの場には適当ではないのではないか。

- (委員長) 今の指摘について、どの部分を③に落とし込んでいるのか事務局に聞きたい。
- (企画監) 作業部会の5つめの◆の意見、作業部会の委員の発言の中から取っている。
- (委員長) 作業部会の委員が言ったままの言葉がここにあり、それが様々なタイプだということか。
- (企画監) これは、学力の差という意味もあるし、特別な支援の必要な生徒という意味もあるし本当に様々なということで、それに対して1つの学校が全部というわけにはいかないが、高校という概念で全てを受け入れるような学校を用意しなければならないということ。
- (委員長) そうすると②、④とか、その前後に今言ったようなことがあって、それをさらに別の表現でこの様書いているとすると、先程の議論とも共通すると思うが、委員の言った言葉をそのままできるだけ反映させるとすると、ちょっと理解しがたい部分があったり、順番を見て前後のつながりが悪かったり、あるいは重複していたりというような部分があるので、先程のまとめのことを念頭に置きつつ、こういった文言の修正も図っていくということはやっていきたい。様々なタイプという言葉自体には、いろいろ誤解を招いてしまうリスクがあり、懸念があるので今の指摘を受けて少し表現を変えていくということによろしいか。他にないか。
- (宮地委員) 先程から出てくる意見も含めて言葉の使い方だが、どうしてもこの意見も、この意見もと全部まとめてやってしまうと結局分からなくなる。例えば、イタリア料理もあり、和食もあり、ラーメン屋もあると全部ある総合食堂になって結局何か分からないという感じになってしまいがちで非常に難しいとは思いますが、この検討委員会を基に次の再編振興に進むことを考えると、やはり分かりやすいというか、読んだ人が理解しやすい言葉を選択する必要がある。8ページの⑩のキャリア教育に関して総合学科とか産業系のところは分かるが、普通科のキャリア教育というのは、言葉では良く理解できるし、冊子にもあったとおり高校生のキャリア教育が重要だということは分かるが、では具体的に何をするのかというと、ちょっとこの⑩の言葉では次のステップが描きにくい。やるとすると科目の中でどこかの会社にインターンシップで行くとか、そんな感じかなと思うが、ちょっと具体性に欠けると思う。
- (委員長) 宮地委員から指摘があったキャリア教育に関しては、作業部会の一番下に◆があってキャリア教育のことが書いてあるが、ここが⑩の表現になっているのか。
- (企画監) そうだ。
- (委員長) このように左側が右側が変わったときに補足的に説明をしたような部分もあれば、逆に順番が変わって、少し理解しづらいようなところも出てきて、誤解を生んだりしがちになる。先程からまとめ方に関しての指摘が続いているが、真意をしっかりとくんだ形で、この部分については再考が必要と思う。まとめについては、時間をかけて議論するとき、表現の分かりにくい部分

は、この委員会としての見解を示さないといけないと思う。

(那須委員) これは言葉だけではない。例えばキャリア教育が必要というのは、作業部会の意見でも必要とだけ書いてあり、なぜ必要かが書いていない。目的を書いていない。大学で教育をしていると、高校から上がってきた子が将来の目的があるかというところほとんどなく、わずかに将来こうなりたいという子はいるが、将来の目的、目標、何を目的にして、何を目標にするかということ語れない。それが問題になって、学生が育たない。高校までの段階でちゃんとやってもらえたら、苦労しないが、3年ぐらいかけてそれを作っている。キャリア教育というのは、私の立場で見たら、そういう目的があって、だからキャリア教育が必要だというように書くと思う。その必要性とか目的を書いていない文章が羅列されているので分かりにくい。

(企画監) ⑩だと、上に自立をするためにというところが目指すところで、意見を聞いていると、キャリア教育について具体的に何をするのかはないが、目的は書いていると思うが、これではないということか。

(那須委員) 例えば自立とは何か。自立しないと社会で生きていけないというのは当たり前で、その自立するための生きる目的をもてないので自立できていない。大学で見ていると賢い子ほど大学に入ってから悩む子が多い。何を目的に生きていけばよいのか、優秀な子ほど悩む。それは聞いてみると何となく生きてきて、自分が何のために生きてきて、何をしたいかということ考えたことがないということになる。もう少し考えていない子は、とにかく良いところに就職しようとストレートに上がっていく。自立というのは、どういう意味があるのかということ考えないとキャリア教育の意味というのは分からないと思う。本当に、ここでそれを書くのであれば、そこを深く分析した中身を、理由付けを書かないと、これをどうやっていくということにならないと思う。キャリア教育の中身にも影響してくると思っている。

(委員長) もちろん1つ1つの言葉の定義を大切にしないといけない。それから那須委員が言われる大学教育の在り方、宮上委員とか私とか大学に籍を置いているので、日々の仕事の中で学生を相手にして感じるところもたくさんある。一方で、今議論している対象は高校生で、多様な高校生に対してということなので、このキャリア教育に対しての自立が、いつの段階での自立として定義していくのか、なかなか難しい部分もあると思う。広い視点で、かつ、それぞれの受け止め方を反映した形で使っていけない難しい言葉ではないかと思っている。今のような言葉のもつ意味とか、背景ということ、ここで議論し始めるとかなり大変で、まだ、適正配置や適正規模とかの議論まで行き着いていないので、提案として、今のような重要な指摘があったことを踏まえ、最終的に、この委員会の取りまとめでは、文章にしていくという事務局の考えも示されたので、その文章の中で文言についても議論もしていきたいと思う。不十分な文章については、さらに意見をいただき、より誤解のないよう、この検討委員会の出した考え方を全ての方々に理解いただけるよう、できるだけ丁寧に作業を進めていきたい。そこでも更に指摘

をいただきたい。重要な指摘があったということにしたい。

(宮上委員) 先程からのまとめに関する各委員からの意見で、委員としては、ここで出た意見がどういう形で集約されていくのかということが見えないので、委員の皆さんからいろいろな意見がでてきているのかなと思う。まとめのプロセスについては、担当の方がやってくれているので、それはそれでその方のまとめ方だと思うが、それを委員が見た時に、この部分はどこにまとめたものというのが見えにくいというのがある。私の思いつきだが、基の部分のどの部分がまとめになっているのか、また、意見としてどの部分を反映させたかを、記号とか番号を付けると、見えやすいと思うがどうか。

(委員長) 今のような考えは非常に大事な考え方だと思う。折角出た検討委員会や作業部会の委員の貴重な意見をできるだけ反映をさせていきたいということに尽きる。最後のまとめ方に関しては、この検討委員会としても、まだ姿が見えていないので非常に不安な部分がある。全体の協議が終わっていないので、逆にどういう取りまとめをしたら良いのかという部分がまだ可視化されていないというところも一方ではある。今日のところは、この後、協議事項があるので、いったん適正規模、適正配置まで入り、ここでの意見をいただいた上で、その他のところで、取りまとめについての見解を示してもらえるのであれば、そこで少しご説明をいただきたい。時間的に余裕がないのであれば、次回の検討委員会において、まとめのフォーマットを少し示してもらい、そのまとめを共通で認識をしたうえで、先程のこれまでの議論を振り返って、どうやってそこに落とし込んでいくかについても、そのプロセスを確認しつつ議論を収斂させていきたい、という方向でよいか。

それでは、確認事項の③までをここまでで終了し、休憩に入る。

(休憩)

## (2) 協議事項

- ①併設型中高一貫教育校について
- ②総合学科について
- ③学校・学科の適正規模について
- ④学校・学科の適正配置について

(委員長) 併設型中高一貫教育校と総合学科については、すでに前回、頭出しをしている。③④が今回初めてのものである。残り1時間半で4項目全体のご意見をいただきたいと思っている。配分を考えながら進行するのでご了承のほどお願いしたい。

### ①併設型中高一貫教育校について

(企画監) 資料1 P10のまとめの部分について説明。

(委員長) 今、まとめの①～⑥を説明していただいたが、先程いろいろなご指摘もあったので、ここでまとめるということは適切ではないし、今から皆さんに

- ご意見をいただきたい。もう一度資料 1-2 に返っていただき、P 4、P 5 にかけて作業部会でご意見いただいたものをご覧いただきながら、これに関連したご意見をいただきたいのが一点、また、それ以外の視点からでもよいので併設型中高一貫教育校に関して検討委員会での意見をいただきたい。
- (宮地委員) いろいろな意見があって、それを柔らかく書いていただいているが、この併設型中高一貫教育校に関しては、受験や進学に関してどうするのが大きなポイントであると思う。作業部会で、1 クラスでも進学エリートクラスを作ってはどうかという意見もあったが、まとめにはトーンダウンするような記載がされているので、そこら辺りがどちらの方向に向かっていくのか、当初の受験エリート校ではなくというスタンスなのか、それとも 6 年間で受験での成果を出そうとする学校なのか、3 校一緒に考える必要はないと思うが、それぞれ明確に示す必要がある。
- (委員長) 前回は意見が出ていたが、併設型中高一貫教育校は必ずしも特定の大学進学を目指す受験エリート校ではないという話が出て、これに関するいろいろな意見が出て、作業部会でも 1 クラスくらいあってもいいのではという意見も聞かれているという指摘である。他に受験エリート校ではないという併設型中高一貫教育校の考え方についてご意見はないか。先程データを示していただきたいという意見が出たのもここである。いろいろな考え方があると思うが、併設型中高一貫教育校に関してご意見はないか。
- (那須委員) 中高一貫教育校にすると学校の規模が小さくても運営できるのか。例えば中学校と高校の先生が交流しながら、学級数が少なくても運営できるといったメリットはあるのか。
- (高等学校課長：以下課長) 中学校だけだと基本的に学級数に対して教員数が配置されるが、高校と併設することによって高校からも中学校に、例えば習熟度別の授業などで乗り入れができるといった意味では中高一貫教育校の方が、教科を全体でカバーできるという部分で中学校の段階を見たときに、より手をかけることができる。
- (那須委員) 例えば、標準的な 4 学級でなくても、中高一貫教育校で 2 学級でも同様の教育が維持できるといったメリットがあるのか。
- (課長) 学習形態だけを考えるとそういうこともあるが、6 年間で部の活動等を考えると、中高一貫教育校であっても一定の規模がいる。ただ、6～8 学級といった大きい数でなくても、少し小さくても 6 年間であれば、可能であると思う。
- (那須委員) 教師の数を考えれば、中学校で必要な教師の数が、中高一貫教育校にすると、中高一貫で同じ数を確保すれば、高校の先生が中学で教え、中学の先生が高校で教えれば、中高一貫教育校にすることで半分の規模の学校であっても、例えば 2 学級の規模であっても 4 学級並みの教育や先生の負担を考えたときに維持できると思ってよいのか。
- (課長) それは違う。

- (企画監) 13歳と18歳では全然違うので、やはり同じ学年で一定の集団が必要である。
- (那須委員) そういうことではなくて、先生が中学校で教えたり高校で教えたりということである。
- (課長) 教員の数は、中学校も高校も学級数に対して何人というように決まっているので、若干の融通が効いても、小さい学級数の学校が大きい学級数の学校のような内容を、教員が少ない状態でやるということにはならない。
- (那須委員) 中学校なりの英語、高校なりの英語を教えると先生の本数は半分で良い。規模半分で中高で普通並みということにならないのか。
- (課長) 教員の持ち時間数を考えれば、学級数に伴って18時間もつということ考えたときに、高校の授業をもっていてさらに中学校の授業をもつと18時間を超えてしまう。高校で2学級規模であれば教員がどれくらいの時間数をもって何人必要であるかということが決まっているので、それプラスということになる。学級数が減ると教員数が減ることになる。
- (那須委員) 理解ができない。
- (委員長) 実際の学級数の資料を紹介していただいたらよいと思う。
- (坂本委員) 前回説明をして頂いたとき、利点というところで高校の専門性のある先生が中学校の生徒を教えることによって免許外の授業を先生が教えなくてもよいという話があった。それが中高が連携した場合のメリットかなと思っていた。今の那須先生のお話の中にあるのは、例えば高校の先生が中学校の生徒を教えるということなので、規模が小さくなれば持ち時間も少なくなるので、1人の先生で中高両方をもてるのではないのかということなので、次の規模の問題に大きく影響してくる部分かなと思う。中高一貫教育校のメリットが何かということをもっとはつきり出していただくといいのかなと思っている。
- 資料1 P10の作業部会の意見の3つ目に、「素晴らしい先生が」とあるが、単にいい先生がいるということを行っているのか、その先生がやっている授業の持ち方がいいと言っているのか、もしそれがいいものなら全体に生かしてもらったらいいなと思う。思い入れがあり、せっかくだいいことをやっているのに他には全然理解されていないと後に書いてあるので、それは何なのかなと興味をもったところである。
- (委員長) 素晴らしい先生とは何なのかという本質的な話になる。
- (企画監) 安芸中高でモチベーションが上がって、意識が高まり教材研究を一所懸命やって教授能力がものすごく高くなったということも踏まえて、素晴らしい先生になったということもある。もちろん個人の本質的な部分もあると思うが、中学校を教えていた生徒を高校でも見ることができるという意識の高まりの中で、中学校1年生の時にどういうことをすれば高校生につながるのかということが見るといった良いことがある。その結果としてレベルが上がったと捉えてもらったらよい。

(委員長) 中高一貫で中学校の生徒が連続した高校に所属しているということで、高校の先生が早く指導ができる利点ということはある。高知南中学・高校の場合は市内に競合する中高一貫の私立の学校があり、そういうところとどう差別化していくのかといった話も前回出ていた。今のお話は、素晴らしい先生がいたり、中学校の生徒にできるだけ早く高校の先生が接触できたりといったメリットだと思うが、私立と県立の差別化になるのかといった点では、私には見えてこない。併設型中高一貫教育校については、安芸、高知南、中村の3校なので、立地も違うので一般論に終始するのではなくて具体的に個別で議論するところもあると思う。そういうところも踏まえて、どんどん意見をいただきたい。

(那須委員) 優秀な子どもがほしいのなら、中高一貫も賛成であるし、そこに進学コースがあってもよいと思う。逆に、その高校しかない地域で、優秀な子どもを扱うクラスが無かったとしたら、その子どもにとっては逆差別になっている。ニーズが地域にあるのなら地域の総意を汲んであげれば一番いいのではないか。

(委員長) 地域の拠点校という言葉がよく使われるが、東部の安芸中学・高校、西部の中村中学・高校、こういったところは地域の拠点校としての位置付けもあり、中高一貫教育校として進学という部分をニーズとして強くもっている子どももいる。その子どもたちの進路を最大限生かしてあげられるような拠点校として機能するべきである。受験エリート校であるとかエリートクラスといった特別進学コースといった位置付けで見られることもあっていいという話である。高知南中学・高校については、近くに私立があるということもあり、若干変わってくる。

(宮地委員) 高知南中学・高校は私立との差別化という話が出てくるが、そんなことはないと思う。大学進学でも、できれば国公立に行ってもらいたいという保護者もたくさんいる。同じ教育レベルがあるとしたら県立の学校に行ってもらった方がいいというのは、当然の親の願いであるわけだから、私立が近くにあるからといって差別化する必要はない。

(委員長) 高知南中学・高校の場合は更に、学校の置かれている状況として内進生と外進生との学力差があるという説明があった。この指摘があるということは内進生と外進生との学力差を埋めていくことも課題としてあると感じている。そういうことも含めて高知南中学・高校の位置付けについては高知市内にあるという環境の中で考えていかななくてはならない。

(教育長) 議論の前提として、高知県にある中高一貫教育校は、中学校から学校に入って内進でそのまま高校に行く生徒と、後から高校に入ってくる生徒がいる。もうひとつ高知県にはない中等教育学校がある。これは、中学校から入ったら高校からはとらないといった学校である。こういう学校の形態もあるということも議論の前提にしているのではないか。次に私学との関係について委員長から話があったが、私学との関係については3校とも違う。安芸については、東部の進学の拠点校として存在しているが、実は安芸地区から高知市

内への私立に通っている生徒が結構いる。中村の方は地理的な条件から地域の中で多くの方が中村中学・高校に通っている。高知南については、生徒からすれば選択肢がいっぱいある地区で、なおかつ県立の中高一貫教育校がある。今後生徒数がどんどん減ってきたときには高知市も減ってくるが、その時に私学との経営上の競合ということは出てくる可能性がある。生徒にとっては、選択がいっぱいあるということになる。

(委員長) 今の前提も踏まえて意見をいただきたい。

(川上委員) 進学実績を上げるというのは、併設型中高一貫教育校に期待されている意見が多いが、そうすると中学入試ということになる。入試の在り方も関わってくる。かつてスタートした時は作文、面接であったが、学力的には上の子が落ちて、下の子どもが入ったということもあり、進学校にするといった場合に課題が出てくるのではないかと思う。今どういう形で中学入試をしているのか教えてもらいたい。

(高等学校課学校教育企画担当チーフ：以下企画チーフ) 県立中学校については、当初は作文と面接、抽選を行ってきた。しかし、進んでいく中でなぜ合格したのか、なぜ不合格になったのか納得がいかないという意見が出て、抽選については、志願倍率が2倍程度以下であれば抽選を行わないという形を経て、現在は抽選を行っていない。適性検査を新たに加えている。具体的には小学4年生までの学習内容をベースとして、小学5、6年生の知識を一問一答形式で問うような内容ではなく、総合的に考える力を問うといった適性検査を課している。

(委員長) 現状はそういうことだそうだ。そこと特別進学コースや受験エリート校といった位置付けになると、入試の在り方は課題にはならないかといった話であった。

(坂本委員) 中高一貫教育校に入って、高校になったときに進路を変更したいという子どもの数を教えてもらいたい。

(委員長) 中学から併設の高校に進まない生徒がいるのかといった質問である。

(企画チーフ) 高校進学時に他の高校に行く生徒は、3中学校で状況は違う。安芸中学校、中村中学校については、若干名である。ひとつは工業高校、農業高校へ行きたい生徒がいることと、中村高校と安芸高校は元々地域の拠点校であったので、ついていけないという2点によって、他の高校に行く。高知南中学校については、多いときには20名くらいである。これについても、安芸や中村のように工業高校や農業高校ということもあるし、私立に行くということもある。

(委員長) 今のような併設の高校に行かないという課題が、仮に先ほどの特別進学とか受験とかいうところで進路変更を余儀なくされているとすると、より進学エリートクラスを設けることも必要になってくるのかもしれない。現状を踏まえ、ニーズがあれば対応をしていく必要があると思う。それが地域の期待に応えるということになる。

(教育長) 生徒が多いときは良い。今は生徒が減ってきて、これからも減っていく。

安芸市でいうと、別の切り口から見たときに、適性検査をして県立中学校が集める。そうすると、市町村で経営している市立の中学校の状況が厳しくなる。こういう側面があるということも事実である。これは四万十市にも言えることである。高知市はそういうことは出てこないかもしれないが、そういう側面があることをご承知いただきたい。

(委員長) 今のような側面があるとしたときに、例えば平成24年度入試で志願者倍率が1倍を切っている県立安芸中学校があるが、これに関して具体的にどう考えるのかというご意見もあればいただいてもよいのかもしれない。ふるいにかけることができにくくなっているということだと思うが、そういう状況の中で地域からの期待との齟齬があるのか、齟齬があるとすればどういう点なのか、更には地元中学校との生徒の獲得合戦につながっていくわけだが、そういったものをどのように見ていくのか、いろいろな視点で意見をいただきたい。どうなれば志願者が上がると考えるのか。

(教育長) 難しい問題である。作業部会でも、良い学校なのに知らないという意見もあった。そんなに知らないということはないのかなとの思いもある。進学を希望している子どもは、安芸市からだが高知市内にも通学できるので、市内の私立に進学している。しかし、いろいろな事情で地域に残りたい中学生で将来進学を考える生徒は県立安芸中学校を選択している。だんだんその人数が減ってきているという状況なのかなと思う。

(委員長) 取組の周知に関してはどうなのか。教育委員会として、また県立安芸中学・高校としては最大限の取組に関する広報活動を行っているという認識なのか。

(企画監) できた当初はポスターを作って配布したこともあったが、市町村立中学校の子どもの数が少なくなってきたので、小学校を回らせてもらう時に、市町村教育委員会に相談したときに、あまり歓迎をして受け入れてくれる状態ではないので、あまり積極的な宣伝活動は実際のところできていないというのが現実である。

(教育長) PRしにくくなっている。

(委員長) 競争が激化しているし、市町村立中学校とのすみ分けもある。しかし、そう言いながら先ほど言われたように、ストロー現象で、言葉は適切ではないが、私立にもっていかれているということが、ある意味生徒数のトータルでの減少につながっている。私立とのすみ分けや特徴付けに関しての競争があって、どうやったら生徒の確保が可能なのかという考え方もでてくる。

(教育長) 県立安芸中学校の場合は私学も見据えながら、地元の市町村立の中学校も見据えながら、その中で全体で子どもの数が減っているという状況も見据えながら、どうやっていくのかということで非常に悩ましい。極端なことを言えば県立中学校はやめるという選択肢もあるが、今も入学を希望する生徒が2クラス近くいる。そのニーズに対して、それを私学が担うことになるのか、一部は地元の中学校が担うということになるのかである。地域の方から

例えば県立安芸中学校は授業料がいないが私立は高い授業料がいるといった問題もある。

(委員長) 現状をストレートに説明いただいた。このままではだめだという状況も一方ではある。存続をどうするのかといった問題にもかかわってくる。競合相手が私立だとすると、言葉は適切ではないが、私立からシェアを獲得しなければならない。私立と競合する部分で特色を出さないといけない。那須委員のおっしゃったように進学といったことになるのかもしれない。その部分を1クラス設ければ、現状も変わってきて、地域のニーズに対して応えることができ、トータルの数としては市町村立の中学校の生徒数の減少につながるまま、県立安芸中学・高校の生徒数の増加につながるのかもしれない。結果、私立は減るのかもしれないが。

## ②総合学科について

(委員長) 資料1 P11にまとめの資料がある。①～⑧を挙げているが、このまとめも今日の議論の中で変わってくると思うので割愛させていただいて、事務局としては先ほどの総合学科の議論は資料1-2のP2からP4までの作業部会での検討内容をもとに検討委員会で議論していただくのがひとつと、追加で補足資料2を説明していただきたい。

### (企画監) 補足資料2の説明

(委員長) 室戸高校、春野高校、須崎高校の3校とも系列が減っていく方向にある。入学者数もそれに伴って減っているというところからも見て、ご理解いただけたと思う。前回、系列が減っているということが、どういう状況になっているのかというご指摘があったので補足していただいた。資料1-2に戻っていただいて、総合学科については、検討委員会から作業部会にお願いをしている。多様な選択科目を維持することができるのか、総合学科の存続の意義は何なのか、生徒の進路に関しての多様なニーズにどう対応しているのか、総合学科の成果と課題に具体的に意見をいただきたいといったことを、先程報告いただいた。先程地域の希望に添えて地元の会社等に就職しているという話があったので、その根拠データや情報をお願いしたい。

(高等学校課再編振興担当チーフ：以下チーフ) 最初に質問があった、地元地域への就職についてだが、意見をいただいたのは室戸高校に関係のある委員からである。このような経済状況なので地域の求人自体も減少しているが、その中で、室戸地域では室戸高校に工業系列を置いているということもあって、鉄工所関係、具体的には廣瀬鉄工業、泉井鉄工所、富士鍛工といった関連の会社への就職、あるいは深層水関係の企業への就職、東部地域ということで見ると安芸市のホテル関係、福祉関係の事業所にも就職をしている。単年度で見ると何十人も就職をしているというわけでないが、年々の累積では地元にも多くの生徒が残っている。春野高校、高知東高校、須崎高校に関しては、交通の事情もあり地元というよりは、かなり広域の就職ということになっている。宿毛高校も求人が厳しい状況ではあるが、地元の福祉関係の事業

所、農協関係に就職している。

(委員長) 総合学科に関して意見はないか。

(宮地委員) 補足資料2の入学者数について確認したい。第4回検討委員会資料2 P4にも入学定員と入学許可者数が記載されている。記載の表現方法が統一されていないので確認したい。補足資料2の入学者数は、入学定員か入学許可者数かどちらの数字であるか。

(企画監) 補足資料2の入学者数は、入学許可者数で実際に入学した生徒数である。

(宮地委員) 例えば、室戸高校の場合、第4回検討委員会資料2 P4から平成24年度の入学許可者数は、65人で、補足資料2より、平成22年度の入学許可者数は、60人と理解してよろしいか。また、春野高校なら平成24年度の入学許可者数は、159人で、平成23年度の入学許可者数は、150人と理解してよろしいか。

(企画監) はい。

(委員長) 先程論点及び考慮すべき点を教育長から補足説明していただいた。総合学科の論点は、現場に近い作業部会より意見をいただいている。かなり多様な系列で選択範囲を広げていることが、現場において負担になっている印象がある。総合学科の存在や目的が、入学者数の減少とともに系列が減っていることから維持できなくなっている。将来の展望が開きにくいこの先10年をどのような状態になるかというところから議論を進めていけばよいか。室戸高校、高知東高校、春野高校、須崎高校、宿毛高校の対象校を考えながらの議論になろう。この中で、前期志願倍率の低いのは、室戸高校の0.62倍と須崎高校の0.63倍である。このような点を踏まえて意見をいただきたい。部会の様々の意見の中に、多様な生徒がいて、多様な進路希望をもっている生徒に対応できる良い制度ではないかと思うとの意見があるが、この多様な進路希望というのが、進学でなく、地元への就職でもなくという意味か。多様な進路希望の例をあげてもらいたい。

(企画監) 総合学科の生徒の中には、大学進学希望者では、国公立大学希望、私立大学希望があり、短期大学希望、また、専門学校希望者には、医療系専門学校、ファッション系専門学校、就職希望者にも県外、県内また地元希望といろいろな希望がある。1年生の段階では、系列に分かれないので、様々な希望をもっている生徒が同じクラスで学習している。進学校であれば、進学希望者のみでクラスが形成される。総合学科は、進路希望の幅が広いという点で、バラエティに富んだ進路希望を指導する大変さがある場合もある。生徒側から見ると、1年生でしっかり将来を見据えることができ、2年生から系列を選択し、興味関心のある教科を学び進路を決定できる点では利点である。

(委員長) 従来の普通科でもない、従来の職業科でもないと否定形で表される場合が多いとの意見ができていますが、多様性へのケアが行き届く点か、総合学科の良さということか。このことが重要なポイントになると思う。

(企画監) すべての総合学科が同じような総合学科にならなくても良い。作業部会の意見にもあったが、室戸高校はこのような総合学科、高知東高校はこのよ

- うな総合学科で良いと考える。総合学科であるので、室戸高校と高知東高校が同じような学校になる必要はない。それぞれの学校が、どのように進むか、しっかりとした方向をもたなければならないとの意見が作業部会であった。
- (委員長) 今のような総合学科を十把一絡げの特色ではなく、地域性とか、それぞれの学校の特色が明確にあるのなら、志願者が少ない学校もあることを踏まえて、もっともっと学校の個性を特色としてPRしなくてはならない。それがどこまで強調されているのか。ここに考える上での重要な視点があるのではないか。
- (澤田委員) 子どもが中学時代に高校を選ぶ時の話になる。その選択の際に、総合学科の話題があがってこなかった。子どもの周辺では、総合学科にあまり関心がないのかと感じている。総合学科の志願者は、地元の中学校の生徒が多いのか。
- (企画監) 地域の生徒が多い傾向にある。地域の生徒が高知市内の高校に進学するため地域に生徒が残らず全体の生徒数が少ないという課題をもつ学校もある。各高校に入学してくる生徒は、設置されている市の公立中学校の生徒が高い割合を占めている。
- (委員長) 生徒の選択肢にあがらないということは、先ほど取り上げたが、否定形から始まったという点に関係してくるのではないか。魅力を十分アピールできていないことになるのではないか。
- (澤田委員) 国公立大学にも進学できる学校であるが、子どもの選択肢にあがらなかったことは、残念である。様々なことが学べる総合学科である利点があるのに話題にあがらない点が残念である。
- (委員長) 生徒の多様な進路に対応している点で、教員のご苦労も相当あると思うので、その価値を感じ取ってくれる生徒が集まってこないことは、もったいない。
- (企画監) 第2回の検討委員会のことになるが、アンケート調査の結果を提示している。そのアンケートの設問の中に「あなたの行きたい高校の学科は何ですか」と中学生に問ったところ、一番回答が多かったのが「進学、就職どちらにも対応できる普通科 508人」、二番目に多かったのが、「進学に重点をおいた普通科 356人」、三番目に多かったのが「総合学科 249人」であり、専門学科より支持されている結果となっている。また、中学生の保護者対象に、「あなたは、県立の高校にどのような学科があると良いと思いますか」との設問では、一番回答が多かったのが「進学、就職どちらにも対応できる普通科 533人」、二番目に多かったのが、「看護・福祉に関する学科 261人」、三番目に多かったのが「総合学科 257人」であった。中学生とその保護者からは、三番目に支持されている学科となっている。
- (委員長) アンケートの結果が、先程の委員から報告があった現場での生徒と保護者の話の感覚的と一致しているのか。アンケートは、優先順位で回答していくので最終的には第一志望ではない項目が上位にくる場合がある。現実の話で、なかなか考慮集合に残ってこないことがある。

- (那須委員) 総合学科は、生徒一人一人のための個別カリキュラムを組むのか。
- (教育長) 例えば、高知市から通える学校には、色々な学校（普通科、農業科、工業科、商業科、水産科、総合学科など）があり、学校にそれぞれ特色があるので、生徒はそれぞれの学校を選択して入学できる。室戸など地域になるといくつものメニューをおく学校を複数配置できない。1つの学校で色々なメニューができる学校とイメージしてもらいたい。その中で、系列を分けることにより、色々なメニューを学習できるようになっている。議題にあがらなかったが、色々なメニューを準備しているが、生徒数が少なくなることにより、色々なメニューを用意することができなくなる。そのことが系列を絞ることにつながっている。室戸高校や須崎高校などは、系列が少なくなっている。しかし、メリットとして、国から配分される教員定数は、総合学科の特性から多く配置される。そのやり繰りは、普通科と比べると多くの教員を配置できることになる。
- (委員長) 教員定数の点から見ると、そのような視点がある。しかし、地域の生徒に支持してもらい、地域の期待に応える学校につながってもらいたい。
- (教育長) 生徒数が少なくなり、総合学科の理念である複数のメニューを揃えることができなくなる。色々なメニューを揃えることができない中で、総合学科を維持していく理由があるのかとの思いもあった。しかし、作業部会の意見を聞くと総合学科を上手く活用すると良いのではないかとの意見が大半を占めていたと感じている。
- (宮地委員) 教員を配置することができるのか、配置しなければならないのかどちらか。
- (教育長) 総合学科は色々なメニューがあるので、それなりの教員がいる。
- (那須委員) ITを使って学校間の連携をやってもいいのか。
- (教育長) どの学校間か。
- (那須委員) 安芸高校と中村高校がそれぞれを衛星放送の双方向の授業を配信できないか。
- (教育長) いまのシステムでは、できる。
- (教育次長：以下次長) 毎時間、毎時間、時間割で指定した曜日にはできないので、授業としては無理である。衛星放送のためだけに両校で時間と科目を合わすことは無理である。
- (那須委員) 時間を合わせたらできるのか。
- (次 長) 合わせたらできない事もない。
- (教育長) 特定の科目に限れば可能であるかもしれない。
- (課 長) 室戸高校と宿毛高校には、福祉系列があるので特徴がある科目なら可能である。
- (那須委員) 特徴のある科目ならできるのか。
- (教育長) 室戸高校ではジオパーク学を授業の中に取り入れている。土佐清水市もジオパーク認定に向けた取り組みを始めている。例えば、室戸高校と清水高校とで互いにジオパーク学を学ぶことは可能である。

- (那須委員) 一緒に勉強すること、こちらにあって、あちらにない場合、お互いに情報を交換し、教育を充実させていくという議論は前回に発言した気がする。
- (委員長) そういうところでICTが出てきたと思う。
- (那須委員) 衛星映像だと、目の前に映像が出てくるし、また、お互いに意見の交換ができるので良いと思う。個人的な意見である。
- (次 長) 現実的には、毎時間、毎時間の授業として取り入れるのは難しい。
- (委員長) 地域性の問題や、多様な受け皿として総合学科があって、総合学科の趣旨を理解して生徒が入学してくると設置の趣旨が十分果たしているとしたものである。総合学科の問題を教育長があげてくれたが、作業部会での意見の中では、系列が少なくなっているが、まだ問題視する意見がないので、選択範囲があると考えたい。しかし、10年先には室戸高校では危機的なことになるので、先のことを見据えてこの会では在り方を議論しなければならない。今の段階では生徒数がいて系列が成り立っていることであるが、10年先がどうなのかである。
- (那須委員) ICTはどうか。金がかかってもハイビジョンの映像でつなげれば、近く感じて、臨場感がある。生徒数が少なくなると衛星でつなぐことも考えられる。個人的な意見である。
- (委員長) 適正配置に絡んでくることである。この総合学科が考慮集合に入らないということもあるので、総合学科として、普通科とも違う、専門学科とも違う個性を出してアピールしていく必要がある。有効手段等を含めてまとめて議論していきたい。一旦総合学科を終わりたい。

③ 学校・学科の適正規模について

④ 学校・学科の適正配置について

(企画監) 資料2の説明。

- (委員長) 適正規模と配置について資料の説明をいただき、ポイントが理解できたと思う。これまでの10年の方針とどのように進んできたか整理されていた。10年前と様々な面で状況が異なってきている。これから先10年間をどのように考えていくか、新しい方針を委員の皆様方と検討する必要となっているので、委員の皆様にご意見をいただきたい。
- (那須委員) 現行基準をどこまで緩和できるか。学校間の連携とか先生方の負担とか先生方の生活の問題もある。その限界を意識しながらどこまで連携できるかなど以前の会で発言したことであるが整理できていない。また、場合によっては教育機会を維持する必要がある学校もある。学校周辺には生活している人がいるので寮の整備も考えられることである。もちろん投資がある。必要な投資なら投資すべきである。500万円程度するハイビジョン映像対応衛星放送設備への投資も小規模校を存続させる上では必要である。どこまで緩和できるか知りたい。高知県はこういうことに先進的な県であるので素晴らしいシステムを構築してもらいたい。

(委員長) 時間調整がありますので、今のような意見を次回いただきたい。学区制が撤廃され、地域の持続性を含めて考えなければならない。再編振興の中に、産業振興的視点を入れていくことが必要であり、この会のミッションである。後は、防災的視点も必要ということで第1回検討委員会に盛り込まれた。この先10年を見据えて、教育的視点で考慮していき、その中で手段として解決できることを先ほどの話のように最新の技術を含めて、少子化高齢化過疎化している地域のモデル化をしていく必要がある。

(那須委員) 農業や林業については、議論した農業高校を一つにするのではなく、東京から生徒を呼ぶことも含めて議論をしないか。

(委員長) 色々な視点があり、資料もたくさん集めてもらった。次回、議論することが多いので、資料2のP2、P3、P4について委員の皆さんから意見をいただきたい。欠席の委員の方への説明については個別に説明していただけるのか。

(企画監) はい。

(委員長) 次回は、すぐに議論に入っていきたい。

### (3) その他

(企画監) 前回の平成12年の報告書をお配りしますので、フォーマットの見本として参考にしてイメージだけでももってほしい。

(委員長) 今配った報告書を参考にして、われわれも報告書を制作しなければならない。このことを念頭に置きながら次回の議論を進めていきたい。その他にないか。

(チーフ) 資料3を見てほしい。前々回の検討委員会で検討委員の任期を延長することが確認されていた。任期延長に関して設置要綱の変更をしなくてはならなくなり、資料3の二重下線部のように平成25年3月31日まで延長し、改正させてほしい。ただ、報告書は秋ごろに提出してもらうことになっているので、3月まで検討委員会を開催するというわけではない。要綱改正についてよろしいか。

(委員長) 任期を延長することについては、前々回確認している。年度末まで任期を延長させてもらうということですがよろしいか。見通しについては、秋ごろとの説明があったが、適正配置、適正規模をこれから議論していく。また、まとめの部分を収束させていきたいところであるので一定の時間が必要である。終わりを決めて議論を進めることも大切であるが、10年間先を決めていく重要なことなので拙速に回数を重ね、まとめが尻切れトンボの状態にしたくない。3月末まで任期を伸ばしてもらったので、予定より回数が増えるかもしれないが充実した取りまとめになるように進めていきたいので、委員の皆様のご理解とご支援をいただきたい。平成25年3月31日までの任期延長を認めてもらえるか。

(委員) 了承。

(委員長) 第7回を9月開催で調整中である。この後、何回までつづくか分からないがよろしくをお願いしたい。

#### 4 閉会

- (1) 閉会挨拶 (教育次長)
- (2) 次回開催日程の確認
- (3) 諸連絡